R2.6

あかなせとやまじょう

赤穴瀬戸山城

登山ガイドマップ

【赤穴瀬戸山城】

赤穴瀬戸山城は標高631mの衣掛山に築かれ、東西約400m、南北約200mに及ぶ広大な山城です。出雲と石見、備後の国境に位置し、銀山街道、出雲街道などが離合集散する街道の要衝にあった赤穴瀬戸山城は、戦国時代には尼子、大内・毛利の戦場となりました。江戸時代には、隣国と街道を監視する堀尾氏の支城として松田左近が派遣され、城の石垣化と城下町の整備が行われました。

主郭からは赤名市街地が一望でき、石垣や虎口、土塁など城の構造を見ることができます。

【武名ヶ平城】

1562年に毛利元就が赤穴氏を攻めた際の陣城で、赤穴瀬戸山城の背後にそびえる標高724mの武名ヶ平山に築かれています。山頂から延びる尾根筋には、無数の削平地が構築されています。

赤名小学校裏の登山口から瀬戸山城までは、およそ30分、瀬戸山城から武名ヶ平山山頂までは、40分ほどかかります。登山道には、城郭の解説板や登山者を和ませる手作りの看板が設置されています。

【1542年の戦い　瀬戸山城攻防戦】

1540年、尼子氏による毛利氏攻めが失敗に終わったことを受け、1542年、周防国の戦国大名大内義隆は尼子氏の本拠地月山富田城を目指し、二万ともいわれる大軍をおこしました。大内氏の軍勢を前に、出雲国内の諸将が次々と大内氏に与する中、尼子方を貫く赤穴瀬戸山城は最初の合戦の舞台となりました。

城下を湖水化し、富田城からの援軍を合わせ、二千人の兵で城に籠城した城主赤穴光清は、大内方の攻撃を度々退けましたが、大内方の総攻撃の際、流れ矢にあたり戦死しました。城は落ちましたが、緒戦において、1か月半にわたって大内軍の進軍を阻んだことは、後の月山富田城の戦いを尼子方の勝利に導く要因となったといわれています。

【吾郷大炊介武利の墓】

「梓弓十字あまりに引きつめて 射ては帰らぬ道にこそ行け」

大内方の総攻撃に際し、老臣吾郷大炊介は城門を守って奮戦しますが力尽き、辞世の句を残し自刃しました。

【1562年の戦い　烏田・森田氏の忠義】

1562年、瀬戸山城では、毛利元就の軍勢の到来を前に軍議が開かれていました。烏田権兵衛と森田左衛門は、赤穴氏は代々尼子へ仕えた家であり、尼子方として戦うべきだと主張しますが、城主の赤穴盛清は家の存続のため毛利氏に従うことを決めるのでした。忠義の戦いを貫こうとする烏田・森田は、城を出て、琴引山や賀田城に陣取り、兵糧を奪うなど毛利軍を悩ませました。

毛利軍に従ったはずの赤穴氏の家臣が進軍を妨害し、赤穴盛清がこれを鎮めようとしないことに疑念を持った毛利元就は赤穴盛清を問い詰めました。

盛清は

「烏田・森田いわく、たとえ主君（盛清）は忠義を捨て給うとも、我々は武門の道に生き、赤穴氏の名を後世にとどめる所存と、私を励まし候。忠義一途の両人を討つこと無道と心得、討伐を差し控え候」

と返答しました。

これに対し、元就は

「もっとも至極なご所存なり、あっぱれなる主従かな」

と、盛清を古今の義者と褒め称えるとともに、烏田、森田を古代中国の清廉潔白な兄弟として知られる「伯夷・叔斉」に例えました。元就は、このような忠義の武士が自分の味方に加わってくれたらどんなに頼もしいことだろうと近習の家臣に語ったといいます。

毛利元就肖像（毛利博物館所蔵）

飯南町へのアクセス

飯南町は島根県中南部にあり、広島県との県境、周囲を1,000m前後の琴引山や大万木山などに囲まれ、平坦地の標高が約450mの県内でも代表的な高原地帯です。

■広島方面から約1時間40分
広島IC～（山陽道・広島道・中国道）～三次IC～（R54）～飯南町

■松江方面から約1時間30分
松江玉造IC（山陰道・松江道）～吉田・掛合IC～（R54）～飯南町

道の駅「赤来高原」

島根県飯石郡飯南町下赤名880-3
電話番号 0854-76-9050
営業時間 9:00～18:00
定 休 日 水曜日
URL https://www.satoyamania.net/

地元食材を使った料理や手作りパンが楽しめるレストラン。

道の駅「頓原」

全国的に珍しい宿泊できる道の駅

島根県飯石郡飯南町花栗48
電話番号 0854-72-1111
営業時間 9:00～17:30
定休日 木曜日
URL http://www.r-yamanami.com/

レストランでは地域の伝統的なワニ料理（サメ）が食べられます。

赤穴瀬戸山城、銀山街道赤名宿の観光情報

飯南町観光協会へお問い合わせください。

飯南町観光協会　0854-76-9050

受付時間　9:00～17:00（水曜日、年末年始は除く）

赤穴瀬戸山城登城記念「御城印」

道の駅赤来高原で販売しています

【赤穴瀬戸山城略年表】

1377年（永和３）	佐波常連が築城に着手したと伝えている。
1542年（天文11）	大内義隆が率いる尼子遠征軍（陶・毛利氏など４万）によって包囲、攻撃される。田中三郎左衛門率いる富田城からの援軍１千人と赤穴軍１千人が籠城、神戸川が堰き止められた赤名の水海を挟んで応戦するも１か月半にわたる攻防の末、落城。
1562年（永禄５）	再び尼子遠征軍（毛利元就ら）との戦場となる。毛利元就は瀬戸山城を見下ろす武名ヶ平山に陣城を構築、瀬戸山城の赤穴氏は次第に陣地を失い、屈服、毛利氏に降る。
1600年ごろ	関ヶ原の戦いののち、松田左近吉久は堀尾吉晴から瀬戸山城を賜り入城。近世城郭への改修を行うとともに、城下に市街地を移転させる。
1615年以降（元和１）	一国一城令の後、しばらくして廃城となる。堀を埋め石垣を壊すなど「破城」が行われたが、道路改良に石材が転用された明治期までは、城跡としての景観を良く残していたと言われている。

赤穴瀬戸山城主郭から赤名市街地を望む

【関連史跡】

●大光寺

赤穴氏歴代の墓地で、宝篋印塔の一つは、赤穴瀬戸山城主赤穴光清の墓石と伝えられています。

●賀田城跡

忠義の士として称えられる烏田権兵衛は飯南町下来島にある賀田城に本拠を置いたとされ、標高494mの松本山には、特徴的な虎口や飯南町では珍しい竪堀群が残っています。

●明窓院

瀬戸山城主赤穴幸清の室、明窓院殿興隆妙顕大姉が開基と伝える曹洞宗の寺院。

明窓院の山門

●松田左近の墓

堀尾吉晴の家臣で瀬戸山城へ派遣されました。『松田氏系譜』には「（左近）賜石州阿加奈城領二万石」と記されています。

【城下町赤名】

江戸時代初め、堀尾吉晴から城を賜った堀尾家の重臣松田左近は瀬戸山城の改修を行うとともに、これまで古市（城の北方およそ２キロ）にあった市街地を移転させ、城下町として整備しました。

現在も残る、クランク状につくられた街道や役割ごとに町を貫く３本の通り、城の谷筋に配置された６つの寺院、奥行きが決められた横町型の町割りなどは、城下町と江戸時代初めの街並みの様子がコンパクトに残る事例として貴重とされています。

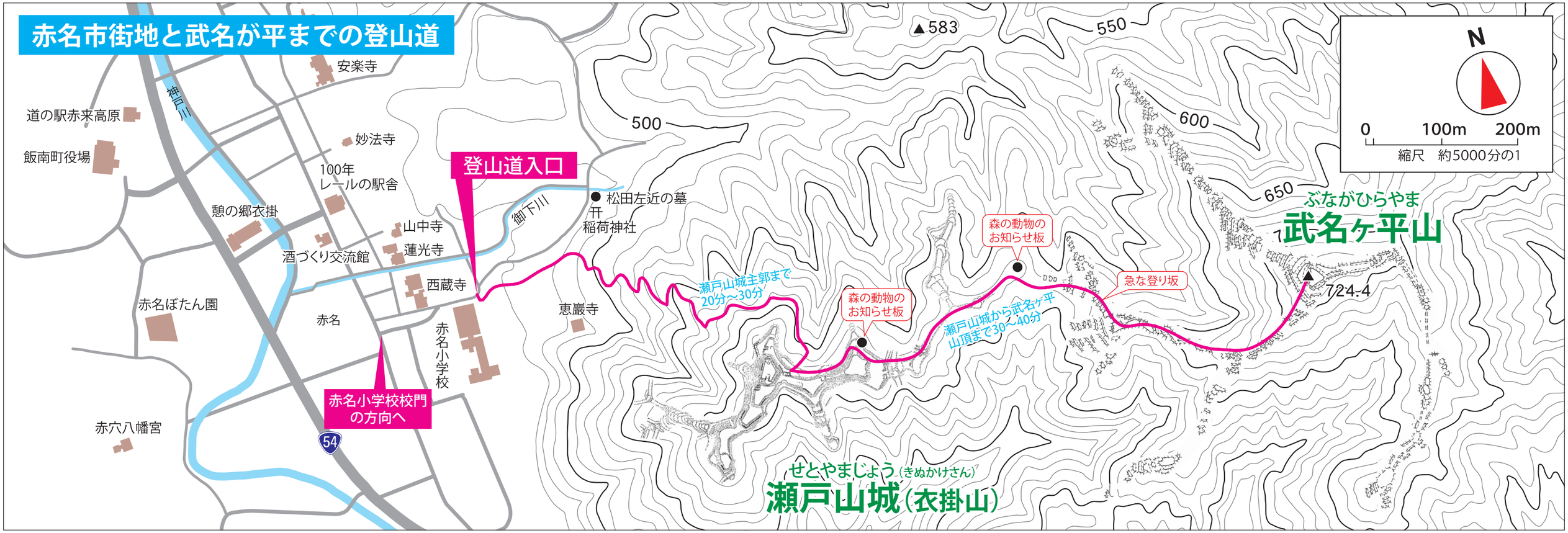
明治時代の絵図にクランクした街道の様子が描かれている。

出雲国上赤名村道路水路絵図

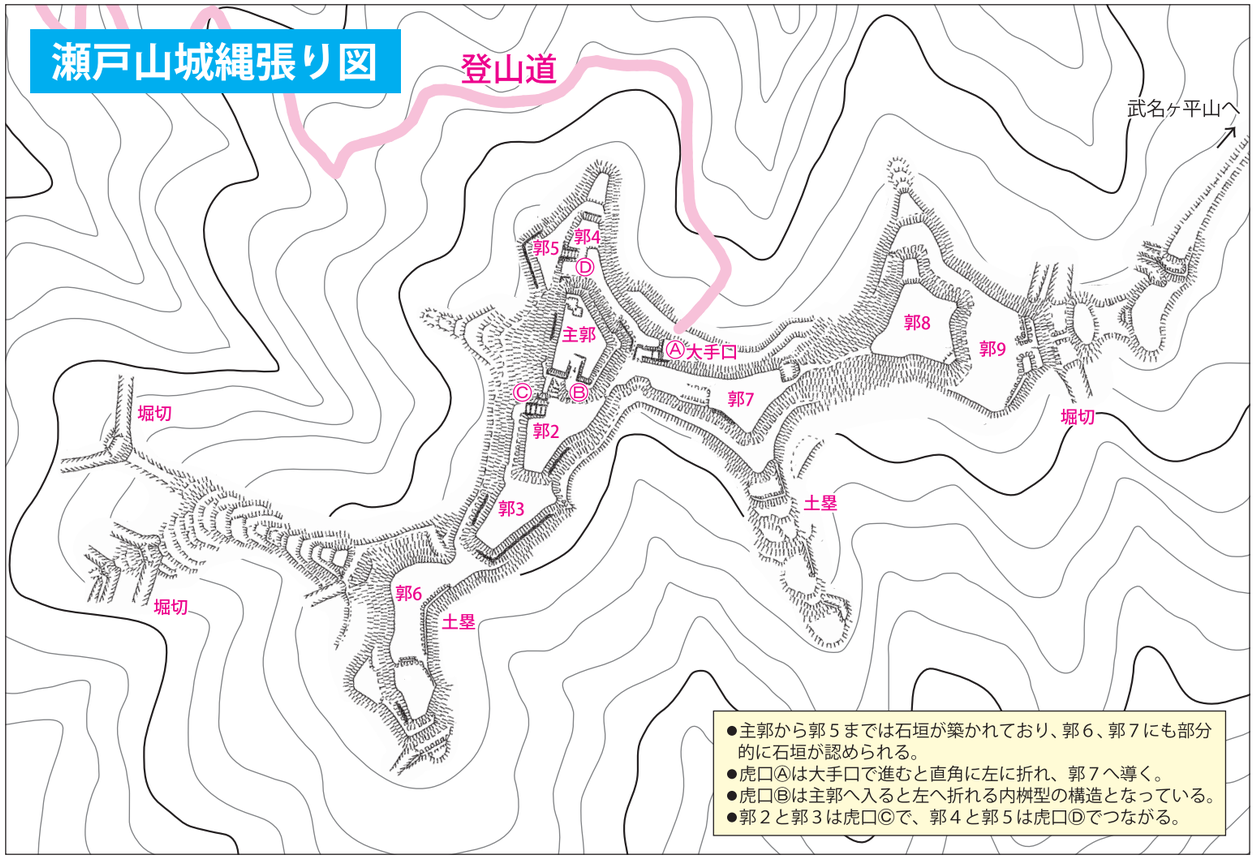
山中鹿介幸盛の守り本尊である金毘羅大権現の木像を寺の鎮守として安置している。寺号も鹿介公の姓を名乗って山中寺とする。

街道沿いに並ぶ6か寺の一つ山中寺

赤名市街地と武名が平までの登山道



瀬戸山城縄張り図



- 主郭から郭５までは石垣が築かれており、郭６、郭７にも部分的に石垣が認められる。
- 虎口Ⓐは大手口で進むと直角に左に折れ、郭７へ導く。
- 虎口Ⓑは主郭へ入ると左へ折れる内桝型の構造となっている。
- 郭２と郭３は虎口Ⓒで、郭４と郭５は虎口Ⓓでつながる。

●赤穴瀬戸山城の石垣

関ケ原の戦いの後、この地域の支配者となった堀尾氏は領民に対し、自らの軍事力と経済力を示す必要があったと考えられ、高層の建物や頑丈な城門などを築きました。こうした建築物を築くためには地盤の強化は不可欠で瀬戸山城にも石垣が築かれました。

堀尾吉晴から瀬戸山城を賜った松田左近は、主郭をはじめ、街道に面した７つの郭、また、大手門、虎口といった部分に石垣を築きました。主郭には曲輪そのものを天守台とし、郭２にあった建物の２階から出入りするような天守がそびえていた可能性も指摘されています。

郭３の石垣のコーナー

郭２から主郭へ

主郭から郭２、郭３を望む